

# 阻む 見えず

## 球磨村

甚大な被害に見舞われた熊本県球磨村では5日も、孤立集落からのヘリコプターやボートによる救助活動が続いた。氾濫した球磨川沿いに幹線道路と

# 逃げ遅れ15人 九死に一生 ラフティング舟で屋根上から救出



ゴムボートで救助に当たるラフティング会社スタッフ。4日午前、熊本県球磨村(氏川マヤさん提供)

集落が集まる村では、土砂とがれきに阻まれて移動もままならない。不安な夜を過ごした村民たちは避難所で疲れた表情を見せた。

高台にある村総合運動公園の一角に設けられた避難所にはヘリで助け出された多くの住民が身を寄せた。日当幸代さん(71)が住む神瀬地区では、近所の家や車が濁流にのみ込まれ、裏山から折れた木々が流れ落ちてきた。自宅はやや高い場所であり、近所の人と一緒に一晩過ごしたという。「集落につながる橋も

球磨川の氾濫で集落全体が濁流にのまれた熊本県球磨村の渡地区。逃げ場を失った15人の住民を救ったのは、ゴムボートで激流を下るラフティング会社「ランドアース」のスタッフたちだった。「集落にいてくれて良かった」。住民の間にそんな感謝の声が広がる。4日午前6時半ごろ、平屋の自宅にいた小川一弥さん(78)と典子さん(75)は逃

流され、水も電気も止まったが、「命は助かったじゃない」と励まし合って耐えた」と振り返った。屋根の上から救助された別の地区の女性(82)は「避難所に着いたのはいいが、今後の生活が心配」と不安そうに語った。

施設が水に漬かり、14人が心肺停止になった特別養護老人ホーム「千寿園」がある渡地区から西側は特に被害が大きい。国道219号は路面が削れている上、壊れた建物のがれきや流木が積み上がり、徒歩で通ることすら困難な状態

げ遅れたことに気付いた。室内に濁流が一気に流れ込み、屋根裏へ上がったものの、その先には壁しかなかった。高さ5メートルほどの信号機まで濁流に漬かった同地区。一弥さんは目についた鉄パイプで壁に穴を開け、屋根の上へ脱出したが、濁流が迫っていた。「流されたら終わり」。典子さんを励まし、寄り添った。

「はよー、助けてー」。あちこちから悲鳴が響く中、高台の氏川マヤさん(47)宅に避難した近所の住民たちは見守ることしかできない。その声に、氏川さん宅に身を寄せていた近くのラフティング会社社長の迫田重光さん(53)とスタッフ2人が反応した。「ボートさえあれば」。そう思っていると、ランドアースの倉庫から流出した修理中のボートを、住民男性が運良く拾い上げたことが判明。ただ、水をかくパドルの代用品はシャベルや

だ。村役場も混乱が続く。村によると、電気や水道などのライフラインが途切れ、携帯電話もつながりにくい。全78集落のうち複数が孤立し、いまだに被害の全容がつかめていないという。

村役場に避難している近くの岡賢治さん(69)は「まさかこんなことになる」とは。携帯電話は圏外で、とにかく情報がほしい」と訴えた。

(金沢皓介、小川勝也、長田健吾、松永圭造ウィリアム)

ほうきしかなかった。ボートの制御は難しかった。スタッフの一人、久保田立爾さん(38)は「レスキューの知識はあるけど本番は初めて」。それでも水流の特性を見極めるプロの目で危険を回避。安全に、確実に、屋根の上で震える住民を次々に救出した。小川さん宅の周りの濁流は渦を巻いていた。「ハイリスクだけどスピード優先。現場は寒く、高齢者は寒さで低体温症になりやすい」。別のスタッフ永田雅代さんがロープを体に巻き付けて救助。救出された住民は氏川さん宅で着替えさせ、布団でくるんで温めた。被災した同社事務所では5日、スタッフ総出で室内にたまった泥のかき出し中だった。迫田さんは「片付いたら、ここをボランティア基地にする」。地域の一人として手を取り合い、復興への苦難も乗り越えるつもりだ。(古川努)